

Sincerity③

校長 菊田勇雄

今日の花あしたの蕾夏椿 (榎本とし)

体育館と校舎に囲まれた中庭の夏椿の木が、白い花を咲かせています。目立たない所にある上に高い位置に花を咲かせているため、目凝らさないと見つけることができませんが、清楚な花はどこか儂げです。それはこの花が朝に咲いて、夕方には花の形のまま落下する一日花だからかもしれません。5枚の花弁を開いた花の傍らでは蕾が膨らんでいます。1本の枝に散りゆく花と咲かんとする蕾が共存している姿に、万物は流転するという自然の摂理を感じます。この夏椿の儂さが仏教の教えに通じたのでしょうか。我が国では、いにしえよりお釈迦様が涅槃に入った時にその根元に横たわったと言われる「沙羅双樹」に擬せられ、「沙羅樹」とも呼ばれています。天候は梅雨寒が続いており、夏の日差しが待ち遠しい今日この頃です。



孫其昌の落款について

校長室にある「教育人材」の扁額が、満州国の高官であった孫其昌の揮毫であることは、前号でご紹介しました。今回は扁額にある落款について若干の考察を加えます。扁額に記された「福島縣相馬中学校」の文字の右上に篆書体で刻された落款が押されています。書道の星先生に協力していただき、「不貪爲寶」と解説できました。その後、出典について調べた結果、「春秋左氏伝」と判明しました。「春秋左氏伝」は、中国の思想家孔子が編纂した歴史書「春秋」の注釈書の一つで、作者は魯の国の左丘明といわれています。襄王15（BC576）年の条に宋の上級官僚である子罕（しかん）が貢ぎ物の受取を断るくだりがあり、その時、『我以不貪爲寶、爾以玉爲寶、若以與我、皆喪寶也（私は貪らざるを以て寶と爲し、爾は玉を以て寶と爲す。若し以て我に與へば、皆寶を喪ふなり）』と言って固辞しています。子罕が清廉潔白な人物であったことを伝える記述であり、孫が子罕を理想とし、この落款を使用したのでしょうか。資料によれば孫は「機略縦横」の人物であったという記述もあり、孫の人物像についての興味が尽きません。ちなみに参考にした明治書院の新釈漢文体系「春秋左氏伝」の著者は、東京教育大学名誉教授の鎌田正氏であり、旧制相馬中学第28回卒の同窓生です。

「不貪爲寶」の落款



アメリカの高校生が来校しました

7月3日、TOMODACHI-MUFG 国際交流プログラムで来日中のアメリカの高校生20名が来校しました。当日は案内役のbuddyを本校生が務め、6校時の授業に参加してもらいました。授業終了後は、本校放送局が過去に作成した震災に関する作品を見てもらいました。また、グループごとに「持続可能な社会への取組」についてディスカッションが行われ、また、テーマにとられない自由なコミュニケーションも行われました。参加した本校生は英語に興味関心がある生徒ばかりで、積極的にアメリカの高校生と交流を図っていました。ディスカッションの時間が終了しても会話は尽きず、帰る間際まで名残を惜しみ、スマートフォンで記念撮影をしたり、メールアドレスを交換したりするなど、若者らしい姿が印象的でした。参加した本校生は、身をもって**英語によるコミュニケーションの楽しさと異文化理解の必要性**を学びました。このプログラムをコーディネートした日本国際生活体験協会（EIL）理事長の鈴木義弘さんは本校理数科卒業です。そのご縁もあって交流が実現しました。生徒にとって素晴らしい機会をいただき、心より感謝申し上げます。



ある朝の出来事より～懐かしい旋律に寄せて～

先日の朝、音楽室を通りかかった時、室内から懐かしいピアノの旋律が流れてきました。一人の生徒がイタリア映画「ニュー・シネマ・パラダイス」の愛のテーマを練習しているところでした。この映画は私が好きな映画の一つで、居間のテレビのハードディスクに保存し完全ノーカット版を時々見えています。映画監督として有名になった主人公サルヴァトーレが、少年時代と青年時代を回想する物語ですが、彼と映写技師アルフレードの交流が物語の柱になっています。ラストシーンはハンカチなしには見られませんが、物語の中盤にもう一つの山があります。主人公が故郷シチリアの村から列車でローマに旅立つ場面です。全てを忘れ帰ってくるなど突き放すアルフレードは、主人公に囁きます。「自分のすることを愛せ。子供の時に映写室を愛したように」。その後、主人公は自分が愛する映画を製作する仕事に就き、自分の仕事を愛し情熱を傾けて地位と名声を獲得します。映画の中で主人公の運命が反転する契機となる言葉には、人生における真実が含まれていると私は思っています。**自分が愛していることを仕事とし、その仕事を愛し続けることが、良き人生につながる**と思うからです。エンリオ・モリコーネの音楽は、郷愁や哀感とともに様々なシーンを思い出させてくれる名曲です。



科学の世界への誘い（大学教授による課題探究型ワークショップ）

理数科1年生を対象に、大学進学ミッション支援事業として大学教授による課題探究型ワークショップが行われています。6月19日は講師に福島大学システム理工学類の小山純正教授をお招きし、「脳と身体の生理学／脳が見る世界・脳が触れる世界」の内容で講義をいただきました。また、7月3日は講師に同大学共生システム理工学類の田中明先生をお招きし、「生体計測入門／簡単なセンサでわかつちゃう！様々なからだの状態」の内容で講義をいただきました。いずれの講義も最先端の研究を分かりやすく、しかも楽しく伝えていただきました。生徒諸君には大学の先生による専門分野の話を参考に、科学の世界への興味関心を高めるとともに、2年次に取り組む課題研究のテーマや内容をじっくり考える手掛かりにして欲しいと思います。なお、第3回は9月11日、第4回は10月16日、第5回は11月20日、第6回は12月4日に予定しています。



田中先生の講義を受ける生徒諸君

地域の課題に取り組もう（イノベーション構想人材育成事業）

1・2年生全員を対象にイノベーション構想人材育成事業に係る取組が行われています。7月4日、1年生はハイテクプラザ、再生可能エネルギー研究所、日本大学工学部を見学し、エネルギー問題について見聞を広めました。7月10日、2年生は檜葉遠隔技術開発支援センター、廃炉国際共同センター、南相馬市のロボットテストフィールド、新地エネルギーセンター、菊池製作所など研究施設と地元企業を見学し、相双地域における復興の取組状況と、廃炉技術・ロボット技術・エネルギー・産業復興について理解を深めてきました。これから普通科2年生が中心となり、「**地域活性化PROJECT (TKP)**」に取り組み、地域の活性化につながる創造的でオリジナリティーにあふれるアイデア・企画・研究などを作成し、市町村自治体に提案する予定です。

同窓生列伝③ 折笠晴秀 (1885-1965) 続編 ～よきライバルと競い合う中での成長～

折笠は明治18年に相馬郡福浦村大字女場字中里に父晴吉と母キクの長男として生まれました。明治23年に小高尋常高等小学校の女場分教場へ入学、小高に置かれた高等科を経て、明治31年に本校の前身である福島県第四尋常中学校に進学しました。在学中の折笠は極めて優秀な生徒で特待生に指定されています。当時の『学歴簿』を見みると、折笠には成績トップを争う同級生がいました。その人の名は門馬末治です。学年によっては門馬が折笠を上回った年もあり、卒業時、門馬と共に「学業及操行優等賞」を授与されています。二人の性質は、折笠が『温良ニシテ敏捷』、門馬が『剛毅勤勉』。よきライバルであったと思われます。結局、在籍5年間の成績を総合し、折笠が首席卒業生として答辞を読みました。その優秀さは後々まで語り草となっており、同郷で相馬中学第39回卒の東北大学名誉教授西山哲男氏は、『各先生から「第一回卒業生で抜群の好成績を挙げ、同級生及び同窓生に甚大な影響を与えたのは、相馬郡最南端にある福浦村出身の折笠晴秀先輩であること、そしてこの大先輩に続くように」というお話を何回かきかされました。これ以来、私は折笠先輩を身近に親しみを感じ、目標に掲げ努力してみようと思うようになりました』と語っています。折笠は門馬というよきライバルを得て学業に励み、後輩達から目標とされる存在になりました。やがて折笠と門馬の二人は、旧制高校を経て東京帝国大学医科に進み、共に医学の道を歩むことになるのです。



必勝！相馬高校

アクティブ・ラーニング研究授業公開がありました

7月11日、アクティブ・ラーニング研究授業公開が行われました。本校ではアクティブ・ラーニングの視点による研究授業を通して、教員の教科指導力の向上を図るとともに、研究協議において情報を共有して生徒の学力向上の方策を考える取組を行っています。今回は以下の通り、物理・化学・地理・日本史の研究授業を公開し、近隣の中学校や高等学校の先生方が来校しました。研究協議では活発な意見交換が行われ、効果的な授業の在り方について情報共有と提案がなされました。今後もアクティブ・ラーニングの視点から授業改善に取り組み「思考力・判断力・表現力」や「主体性・対話力・協働性」など、これから求められる資質・能力の育成を図っていきます。参加された先生方には心より感謝申し上げます。

- 【物理】松岡浩三「偏光現象とその原理について」
- 【化学】西山博文「溶液の性質について」
- 【日本史】立野陽平「摂関政治について」
- 【地理B】鶴川さくら「地形図から読み取る地域課題」

